



「長久手のまつり」レリーフ（縦1m×横2m）

作者 あらかわ やすし
荒川 寧

*設置場所 西小学校

*経歴

1948 生まれ
1974 荒川児童美術研究所 主宰
1984 名古屋デザイン専門学校 教諭
現在 愛知産業大学造形学部産業デザイン学科 助教授
愛知産業大学通信教育部造形学部 助教授

*コメント

町には「警固祭り」があります。それには、馬の塔、鉄砲隊、棒隊が出ます。他県では見られない特色ある「まつり」です。農民の素朴な祭礼の中にも勇壮で荒々しく、男っぽさを感じます。

私が長久手に住み始めたのは30余年前、長久手の大学に入学するためでした。それから、村は町へ、風景は大きく変わりました。変わらないのが「長久手のまつり」です。しかし、生活が変化するとともに「まつり」に対する人々の捉え方も変わってきたと思います。

長久手町から西小学校の壁面を飾る作品の制作依頼を受けた時、この美しい「まつり」を棒の手を中心に、「まつり」に集まった人々の表情を表現しようと考えました。

そして、私が見て来た長久手の記録として。



「 水 」 日本画 (20号P)

作者 加藤 厚

*設置場所 福祉の家

*経歴

1957 半田市生まれ
1982 愛知県立芸術大学 絵画専攻 (日本画) 卒業
1984 愛知県立芸術大学大学院 修了
現在 愛知県立芸術大学非常勤講師
名古屋城本丸御殿障壁画復元模写従事
日本美術院院友

*コメント

青少年公園の北、熊張の雑木林です。季節のうつろいを感じる雑木林は大好きなモチーフの一つです。自然の豊かな長久手の風景を1枚でも多く描きとめて置きたいと思っています。



「 峯 」 日本画 (20号P)

作者 はっとり 服部 のりゆき 憲幸

*設置場所 福祉の家

*経歴

1963 名古屋市生まれ

1990 愛知県立芸術大学大学院美術学部（日本画専攻） 修了

現在 愛知県立芸術大学非常勤講師

日本美術院院友

名古屋城本丸御殿障壁画復元模写事業従事

*コメント

本作品「峯」は日本の屋根 北アルプスの槍ヶ岳をモチーフとしています。私は山歩き趣味としており、その時に心に残った場所、感動した風景をスケッチしています。この時は燕岳から上高地への縦走中西岳より夕日の当たる槍ヶ岳が神々しく思え夢中でスケッチしました。空が茜色に染まるのは一瞬でしかありませんので心の中に残った色を再現いたしました。

絵を見てくれる方にこの感動を少しでも伝えることができたなら幸いです。



「 兔 」 日本画 (20号F)

作者 古田 年寿

*設置場所 福祉の家

*経歴

1966 津島市生まれ
1990 愛知県立芸術大学卒業
1992 愛知県立芸術大学大学院修了
現在 愛知県立芸術大学非常勤講師
日本美術院院友

*コメント

数年前、ある女子高で美術の非常勤講師をしていました。その西洋美術史の授業でスーチンの死んだ兎が吊るされた絵を見せたことがあります。その時、近くにいた生徒の一人が誰に語りかけるでもなくこんなことを言ったのです。「犬や猫は痛くて苦し時、声にすることができるけど兎はそれができないもんね。」それは私が期待していた言葉とは程遠く高校生にしてはなんて稚拙な感想なんだろうと気にも止めませんでした。ところが、授業後冷静に考えてみると彼女の言葉も満更ではないと思えてきたのです。動物学的に詳しいことはわかりませんが、確かに兎の感情表現の方法は我々一般人には顕著に伝わってきません。ただ、彼女は純粹に弱者への慈しみの念を抱いていたのです。私は、この素直な言葉に忘れかけていた大切なものを思い知らされた様な気がしました。そして、月日が流れた今でも時折この言葉を思い出します。



「まどろみ」 日本画 (20号)

作者 馬場 弥生

*設置場所 福祉の家

*経歴

- 1970 名古屋市生まれ
- 1996 愛知県立芸術大学美術学部日本画科卒業
- 1998 愛知県立芸術大学大学院修了
- 1999 愛知県立芸術大学大学院研修科修了



「ちひょうのいきもの」(幅 200 cm×高さ 80 cm×奥行 120 cm)

作者 おおくぼ つとむ
大久保 努

*設置場所 福祉の家

*経歴

1968 熊本県天草郡苓北町生まれ

1994 愛知県立芸術大学院修了

*コメント

あるところに、丸みをおびた塊がふたつ。

さわってみた。座ってみた。

いきものの匂いがした。

その塊はちひょうの上に、私もちひょうの上に。

いきものはやがて太陽の光、天の水を充分受けて、空へ向かってのびるだろう。



「 陽の鳥 」 (縦 300 cm×横 300 cm)

作者 野呂 有里

*設置場所 福祉の家

*経歴

1977 生まれ
2000 愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻卒業
2002 愛知県立芸術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了
現在 コンフォートクック株式会社勤務
愛知県立芸術大学デザイン専攻非常勤講師

*コメント

生命に流れる無数の線はすべて輝いています。ひとつの命をつなげるために、新しい枝をのぼし新しい可能性を探りながら創られる生という世界。生命は宇宙。生という宇宙にめぐりあった時、人は自身にも流れる無数の線や音や動きについて思う。そして、それ自体が輝いていることに気付く。物事が多様化する中で、生きるということとは何かを見失うことも少なくありません。私は生きているという事それ自体が尊くすばらしく輝いているのだということをもう一度、作品を通しみつめてみたいと思いました。この作品“陽の鳥”(ヒノトリ)は、太陽の光りをいっぱいに浴びて大空を飛ぶ鳥を表現しています。太陽が放つ光は、命の光。そんな光りを浴びて大空を飛ぶ鳥を生命の希望の象徴として“福祉の家”を訪れる多くの方々に、生きているということの素晴らしさについて、そして、自信の中に宿る輝ける生について感じていただければ幸いです。



「水脈一内側に吹く風」(150 cm×180 cm×65 cm)

作者 菅野 泰史

*設置場所 せせらぎの径

*経歴

1971 宮城県生まれ
1994 東北生活文化大学 卒業
1997 愛知県立芸術大学大学院美術研究科 修了
1998 愛知県立芸術大学大学院研修科 修了
現在 愛知県立芸術大学非常勤講師

*コメント

私は、風や気、時間などのように目には見えがたいけれども感覚的には確実に認識できる自然の中の一流れ—の様な物の存在と、それらが作り出す様々な痕跡を手懸りにして、場やそのものの内側にすでに内包されている空間性を人間の意志や記憶、またその営みの蓄積と痕跡とを共に形体化し、それら全てのことを再認識することができるような空間を作り出したいと考えています。

このせせらぎの径は、従来川であった上に作られた人工的な遊歩道で一目ではその事実に気付くことは難しいほど美しく整備され、また町民に親しまれている。私は、この作品をこのせせらぎの径に置くことで、この場の記憶をあらためて顕在化し、目には見えないけれども確実に今でも存在し、流れ続けている川というものを再認識し、自然の豊かさとの調和した営みのあり方を考えるきっかけに出来上がればと思います。また、近隣に出来る駅からの人の流れとも絡み親しまれる空間が出来上がるのではないだろうかと考えています。



「音の便り」(幅15cm 高さ100cm 奥行50cm)

作者 葉栗 剛

*設置場所 北小学校

*経歴

1982 愛知県立芸術大学彫刻科卒業

1984 愛知県立芸術大学大学院修了

*コメント

前回打ち合わせで北小学校を訪れたとき、生徒たちのほがらかな顔をみていたら自分の小学生時代を思い出しました。また環境的にも自然の中にあり、この「自然」をテーマにしました。

彫刻＝美術品 という概念やモニュメンタルな作品ではなく、学校の中、生徒たちや自然と調和する作品にしたいと思います。

「音の便り」という一連の作品の題名は、音という目に見えない物を彫刻という物体で表現し、人それぞれの記憶の中にある過去・現在・未来を作品を通して感じることができるよう挑戦しているシリーズです。

今回は、男の子、女の子にリコーダーを持たせ吹いているポーズを作ります。

生徒たちがこの作品を見て、まねをしたり、触ったり、笑ったりして、子どもたちの仲間になってくれたらと願います。



「浮遊」(縦180 cm×横1200 cm×厚さ12 cm)

作者 横田 正史

*設置場所 色金保育園

*経歴

- 1952 福岡県生まれ
- 1976 愛知県立芸術大学彫刻専攻卒業
- 1978 愛知県立芸術大学大学院修了

*コメント

今回の作品は、緑青のナチュラルな自然発色の色で仕上げます。ステンレスボルトで浮かせて取り付けますので、壁を汚すことはありません。作品のイメージはシンボリックなものではなく、108個の不定形な形の集積で全体とします。日々変わる光と影と作品を交わせる事で、八百万の命の存在を光の中に浮かび上がらせたいと思います。何か分からないかも知れないものが四季の季節の中、太陽の角度、高さで変えたり離れて見えたりと、見る時見る場所によっても違った感じになり、見てくださる人たちに『不思議だなー』という印象を持ってもらえたら幸いに思います。108個のオブジェは、どれひとつとして同じ形ではないので、バラバラな個々の存在として、光と影を伴いながら壁面全体を、いたずらっ子みたいに駆け回ることでしょう。ナチュラルな色、ナチュラルな形で景色に溶け込む事を意識をして、作品を創ります。1988年にサンプルを作ってから以来、抱き続けて来たこのイメージを、類型的な作品ではなく、ナスタシウムの花が美しいように、接岸する流氷群が美しいように表現できたらと思います。本当にやっとな作品とする事が出来るという喜びで、今は闘志がわいています。



「sagamine」(55×90×61 cm) 「in the forest」(37×31×65 cm)

作者 やまもと 山本 とみあき 富章

*設置場所 色金保育園

*経歴

1949 愛知県生まれ

1975 愛知県立芸術大学大学院 修了

*コメント

2つの作品は1999年に大学教員展に展示された「Along a creek 一家形試作」にその原点がある。2000年にデトロイトのニューアートミュージアムで開催された展覧会 e-mona には「house shape」を送り、2001年の個展（アキライケダギャラリー）では「SAGAMINE ZIGZAG」のタイトルを付けた3点と「Creek in the forest」の2点を展示の一部分としてインスタレーションした。2002年のシーズンアーオプログラムの個展ではすべてをこのタイプの作品14点からなるインスタレーションとした。

「sagamine」の由来は芸大の地名であるが、その形はアトリエのこぎり型の屋根を基にしたものであり、「in the forest」は現在アトリエを構えている藤岡の建物とその森を暗示した者である。製作地の周辺を彷徨し、また精査しつつ、表現の根幹を絶えず問い続けている作品である。



「 樹層 」 (高さ 240 cm×幅 110 cm×奥行 75 cm)

作者 清藤 隆由

*設置場所 まちづくりセンター

*経歴

1970 大阪府高槻市生まれ
1994 愛知県立芸術大学美術学部美術学科彫刻専攻卒業
1996 愛知県立芸術大学大学院彫刻専攻修了
現在 愛知県立芸術大学非常勤講師

*コメント

リニモが通り、万博が開催されるとは思いもよらなかったことで、その間にこの町はすごく変わり、人々の行き来が多くあったようにみえます。町民もそのあいだに3割ほど増えているそうです。人々の出会いが必然と多くなるのでしょうか。その出会いの場のひとつとして、「文化の家」「福祉の家」とともに「長久手町まちづくりセンター」がその交流の拠点としての施設になると聞きます。それをふまえて、そこに設置されるモニュメントは、交流をもつために集まった人々のための目印になればと計画します。大地の延長として土でつくる。地面から樹木がどんどん伸びていくように上に上に。その場所に種が舞い降り土の中から芽が出て根をひろげ成長していくような、植物のようでもあり動物のようでもある、なんだか不思議な生命体というイメージ。土を積んで重ねて層にしてく、その作業にそのイメージをトッピングしながら手に任せる、その繰り返し。それを焼いて永久的に対応できる素材となる。近所の子供たちが作品名とは別にニックネームみたいなものをつけて地元根付く、そんな身近な存在のモニュメントになればいいと思います。



「そらのなか」(高さ160cm×幅160cm×奥行50cm)

作者 中根 栄二

*設置場所 長久手小学校

*経歴

- 1973 愛知県生まれ
- 1995 岩手大学教育学部特設美術科卒業
- 1997 愛知県立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了
- 1998 愛知県立芸術大学大学院研修科修了

*コメント

今回作品に使用する意志は新潟県津南町の中津川安山岩を使用したいと思います。この石は、岩盤から採取されるのではなく畑のじゃがいもの様に地中から玉石で掘り起こします。何年もかけて川を転がって角が取れてきた医師が土に埋もれているのです。

この長い間自然の力によって加工された石の真ん中を丸くくり抜き、太陽の形とします。そして、真ん中に置かれる2つのものは人(こども)であり、空に浮かぶ雲のようでもあり、学校に棲む見えない何かかもしれません。このくり抜かれたところから見える風景はこどもと学校と長久手の町が1つになった瞬間に思えます。



「^{じあい}慈愛」 日本画 (P50号)



せいせい
「生生」
パステル画(八つ切り)

作者 ^{むさしはら}武蔵原 ^{ゆうじ}裕二

*設置場所 長湫南保育園 正面玄関「慈愛」、相談室「生生」

*経歴

1976 岐阜県生まれ
2000 愛知県立芸術大学美術学部美術科日本画専攻卒業
2002 愛知県立芸術大学大学院美術研究科日本画修了
現在 日本美術院院友
NHK 文化センター講師

*コメント

私はよく動物をモチーフにし、いろいろな動物園などに行きますが、今回の作品は豊橋動植物園のオラウータンの親子です。絵描きたい動物の子どもに出会うチャンスはなかなかなく、ここぞとばかりに観察しました。

子どもは、親の側を離れることなく無邪気に遊び、それを母親は絶えずうかがい、とてもいとおしそうに、とろけるような表情で見守っていました。

オラウータンは、“森の人”と呼ばれているほど人間によく似た動物です。そんな親子関係と園児たちとを重ね合わせ、今後の成長への願いをこの作品に込めました。



「生まれてくるモノ」

(高さ 165 cm×幅 50 cm×奥行 60 cm)



「内にあるモノ」

(高さ 100 cm×幅 100 cm×奥行 100 cm)

作者 山本 久史

*設置場所 青少年児童センター

*経歴

- 1973 三重県四日市市生まれ
- 1996 愛知産業大学 造形学部卒業
- 2002 愛知県立芸術大学大学院彫刻科卒業

*コメント

私たちは、日常の生活の中で「自分」が何なのかなんてあまり考えることはありません、しかし、よく考えてみると、自分と知っている存在は、地球を構成する物質の集まりであり、つまり、自分自身も地球や宇宙の一部なのだとすることに気づきます。私は、意識のずっと深くから湧いてくるものを形にしていくことで、自分自身の中にある自然の法則や根源的なエネルギーを確認しています。この作品は、実際に見て、触って、感じてほしい作品です、根源的なものは誰にでも共通するものなので、実際に触れながら、私が何を感じ、何を形にしようとしたのかを想像してもらいたい、そして、その人の意識の中にもある自然の法則を感じとるきっかけになればと思います。



「水の記憶」(高さ200cm×幅400cm×奥行180cm)

作者 かわぐち のりみつ
川口 智慎

*設置場所 市が洞小学校

*経歴

1973 生まれ
1996 愛知県立芸術大学大学院美術学部彫刻専攻卒業
1998 愛知県立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻修了
1999 愛知県立芸術大学大学院美術研究科研修課程彫刻専攻修了
現在 岐阜県立加納高等学校 美術科 非常勤講師(美術・彫刻専攻)
(財)NEO桜交流ランド 創造体験工房 陶芸 工房指導員
愛知県立芸術大学 美術学部 彫刻専攻 非常勤講師

*コメント

「私が田舎の小学校に通っていた頃、雨の日の登校や授業は嫌いだったが、雨の日のグラウンドが好きだった。晴れた日と違い、外でサッカーやドッチボールなどをして、みんなと遊ぶことが出来なかったが、グラウンドにある水たまりを使って自分だけの空間を作ることが楽しみだった。(いわゆる水遊びである。) 昼休みや下校の時、グラウンドの水たまりで、傘や、ずぶ濡れの靴先で地面に溝を掘り、自分の思うように雨水をコントロールする。水の流れを作り空間を広げていく。」そんな思い出と遊び心からこの作品を作ってみようと考えました。「雨(自然の力)により作品が動き、水の流れや水音を聞くことができる。」作品を通して自然を再認識できるのでは。



「 生命の樹 」 (300 cm×幅 400 cm×奥行 180 cm)

作者 愛知県立芸術大学 ながくてアートプロジェクト
(土屋公雄研究室)

*設置場所 ながくてエコハウス

*コメント

大地に横たわる巨人のおなかからは、大きな木が生えている。
大きく枝を張ったその木には、
月や雲そして楽園に咲く花を思い起こさせる沢山の窓が開いている。
そこからは蛇や小鳥などの生き物が顔を出し雲も浮かんでおり、
それらは巨人に見たてた花壇によって周囲を囲まれている。

楽園のイメージで作られたこの木には生命を大切にしようという
思いが込められており、
そんな思いを伝えるために、
子どもたちが花を植えるワークショップを行うことも可能である。